

自然界における永久運動の構想
ー ヴィエスワフ・コタンスキ著『日本の神々の遺産』意識・その4 ー

松 井 嘉 和*

**Imagining the Framework of Eternal Movement in
the World—chapter 4**

Yoshikazu Matsui*

Abstract

The late Dr. Wiesław KOTAŃSKI (1915-2005) at Warsaw University in Poland has been studied in the KOJIKI throughout his life-time. This paper is free translation from the fragment, the Chapter 4 of Part II, of his main work entitled "Dziedzictwo Japonskich Bogów" (Heritage kept in the Japanese Deities) .

He insisted that the messages for the better life, which might be meaningful even in the modern world, are left in the KOJIKI could be found by analyzing the epithet of the deities appeared in the KOJIKI. In this paragraph he analysed the meaning and the function of the Diety whose name is Wumasi'asikabifikodi which appeared just after two deities, Takamimusufi and Kamimusufi.

キーワード

宇宙の混沌と統合化、神の任務、タカミムスヒ、カミムスヒ、ウマシアシカビヒコヂ

* まつい よしかず：大阪国際大学国際コミュニケーション学部教授〈2014.12.3受理〉

翻訳

自然界における永久運動の構想

―ヴィエスワフ・コタンスキ著『日本の神々の遺産』意識・その4―

松井嘉和

はじめに 訳者より

本稿は、ポーランドの日本研究の今日の隆盛の基礎を築いた故ヴィエスワフ・コタンスキ博士（一九一五―二〇〇五）のライフワークであった『古事記』の解説の集大成である“Dzielnictwo Japońskich Bogów”（日本の神々の遺産）の一節を意訳して紹介するものである。本稿は、同書の四十分の一程度に過ぎない僅かの部分だが、ここにも同博士の『古事記』の解説つまりその『古事記』の独特の理解に基づいた神名の解釈が窺える。同書の概要は、本紀要第二十四巻第二号に発表した「すべては混沌から始まる」の「はじめに」で記述した。それは、右の書の第Ⅱ部第二章だったが、その後、本紀要の第二十五巻第二号には、同書の第Ⅲ部第一章「太陽神統治体制の基盤の生成」の部分在意訳して紹介し、さらに、本紀要第二十八巻第二号には、本稿で取り上げられている神の直前に登場している二柱の神々を考察した「自然界における永久運動はどのように構想されたのか」を紹介した。それは同書の第Ⅱ部第三章であったが、本稿は、それに続く、同書の第Ⅱ部第四章の部分である。

「意識」とした所以については、本紀要前号第二十八巻第二号に掲載された意識論文の「はじめに」に述べた。

今回は、『古事記』研究の伝統的流れの立場からは、訳者自身も奇異とも映ずる不安も残るコタンスキ博士の独特の神名解釈について、その結果が出てくる基本的な原理つまり同博士の『古事記』解説の方法論における最も根本的な二点の原則を述べておく。

その一つは、神々の出現する順序にも宇宙生成と固成化の経過が反映していて、その順序は決して恣意的ではないとする点である。『古事記』に出現している神々は、『古事記』の主題の一つである修理固成是多陀用幣流之國（このただよへるくにを つくりかためなせと）という天神の指令を実現させる使命を個々に担うだけではなく、神々全体でその使命を担い、その分担の内容は、個々の神の名とともにその出現順序にも暗示されているとするのである。

また、神々の出現だけではなく、物語が進行する経緯についても、従来の研究に頻繁に見える、ある物語がそこにあるのはたまたま混入したものだ、と見ることはしない。つまり、ある物語が『古事記』の中で置かれた位置について、その恣意性を認めて『古

『事記』が様々な要素が混合した結果の書物だとする見解は否定するのである。

以上のように、神々が出現した順序や個々の物語は恣意的に偶然にその位置に置かれて語られてきたのではない。『古事記』は相互の関連性のない部分が混在した作品だ、という解釈を捨てて、『古事記』の物語の流れに、一貫したメッセージを伝えるという作品としての『古事記』の統一した編纂意図を、部分からではなく、全体を視野に入れて解釈するわけである。

そこで、例えば、冒頭の神アメノミナカヌシノカミの場合について、この神が天を造り上げて主宰しているのではなく、この神が出現したときにはすでにもう高天原はあったのだから、この神の使命は、天を統括することではなく、地上のモデルとしての天上界を「修理固成」するということになり、従来、その神が天の中心者であるという考えを一端無視して検討することが必要となってきたのであった。

その検討に進むとき、神名の意味は表記された漢字ではなく音に隠されていて、それを解読することが神名の本来の意味の理解となる、としたのである。これが、コタンスキ博士の『古事記』解説のためのもう一つの大原則である。意味を持った文字で書かれたその意味をそのまま無条件には受け入れずに、漢字は表音文字として、言い換えると、いわば万葉仮名として、その意味の把握に取り組み、分析と考察に踏み出したのであった。その神名の音から形態素を抽出して、初めて意味が確定される、として、神名の意味を考察し続けたのである。

以上が、コタンスキ博士の『古事記』の解説の基本的立場なので、

このことを想定しながら、以下の訳文で、コタンスキ博士が提言する『古事記』とくにその神名の新しい解説の方法と「結果」を理解していただきたい。なお、今、結論と言わずに結果と言ったのは、コタンスキ博士は、常にあらたな解釈の可能性を探究し続け、自身の解釈はある時点の結論つまりその時点での結果であって、結果は常に再吟味にさらされなければならない考えていたからである。そこで、本書でも、何度か、ある年の段階では斯く斯く解釈したが、現在は異なる結果を得た、という表現が見られるわけである。

第Ⅱ部 第3章 自然界における永久運動はどのように構想されたのか

Ⅱ. 4. A. ウマシアシカビヒコヂ

前節までで、三柱の神々を取り上げた。その三柱すべての神々は、独神として単立の存在であると表示されていた。それは、この物語の後に出現し始める明らかに夫婦のカップルである神々と区別するための表示であるとは認められている。

ただ、その夫婦関係に関して、たいいてい婚礼の儀式は述べられていない。たとえ儀式が行われたとしても、それは、ただ一人との結婚を成立させるだけのことであった。儀式の遂行が、神々の特権であったのか、あるいは太古の人々にも付与されていた特典であったのかはわからない。いずれにせよ、人間には類繁なことではなかったが、神々は伴侶を一人に限らないことがしばしばで、

異性との親密な出会いのすべてが夫婦関係の結びつきだったと考えられないことは確かである。

日本の特に宗教学の論文で、この独神という問題について多すぎると言いたいほどの注釈が繰り返され、例えば、独神が子孫を持つことを問題にして論ずる等々の枝葉末節な問題に堂々巡りをしている。明らかにこれらの問題は本質的ではないし、父が子を儲けるのは夫婦が成立したかどうかに関係なく、側室からでも子孫は生まれ、神道の考え方では、結婚は何か高尚なこととは全く考えられてこなかった。そこで、最も古い始源の神々は両性具有で、その神々は、ギリシャ神話の神の生成で独立性を示している神々が存在するように独りで充足している独行の能力を発揮していなかったのかどうか、エリアーデの見解を参考に、推定して考察することが可能となっている。

本書のここまでは、まだ検討していない独神の神々の四つの名称がある。その中でも、形態的かつ意味の理解の点で最も複雑な名前は、*Kaminusii* カミムスビのすぐ後に現れている *Wunasi:asikabiikodi* ウンシアシカビヒコデだろう。

すでに八世紀の『古事記』の編纂者たちにも、この神の名は全く理解できなかったに違いない。と言うのは、読者にとっては意味論的な解釈の際に自由な選択の余地が残されてはいるながらも、神名が音写されて記載されているために、書き記すために用いられた表意文字の図像的な原理に基づいた解釈を適用すれば、それで神名の正しい意味の把握ができるわけではないという制約があるからである。

この神の意味の理解が難しいことについて、いっそうはつきり

させるために、自明の証拠はないものの、敢えて次のような仮説を立てることができよう。この神は、幾百年も前から確実に広く誰もから知られていたのだが、太古のそれ自身の意義を失っていて、神話が解読されるに当たっても、その意義について語られることもなくなっていたのだ、と。

そのような出来事は、神話の伝承によくありがちなことで、幾つもの神々の名が人の記憶から消え去り、その神の役割が時の経過とともに無内容で無目的になってしまふことは原理的には驚くべきことでもない。文化や文明は絶えず前進しているのだから、ある一つの分野が古くなると、それが占めていた分野に新しいものが生み出されていて、その分野に直接関わっていたその保護者たちは、必要がなくなってしまうものだ。

それにもかかわらず、『古事記』の編者は、本節で今論じているこの神の名に付随しているヒントとなる形態をその中に入れ込むことを容認していた。そのヒントとは、アシカビ *asikabi* と発音する構成要素に何の疑念も生じさせずに、「葦の若芽」という意味があるとしたことである。ともあれ、この神の名の全体は「葦の伸びる勢いのあるすばらしい男性的な力」という意味に違いない。

宇宙生成のこのような早い段階に関する記述の中で、名前をこのように文字の意味通りに書き込むことは完璧な表記なのだろうが、その名を表記した好ましくない例外的なことであつただろう。なぜなら、神名は秘義という本性をもち、本名で提示されるものではなかったはずだからである。従って、それは、原初のテキストよりも後の時代に記入された注釈と考えられる語句の解釈の中

に見える例と考えることができる。言い換えると、口承されてきたテキストにはそのような挿入はなかったと考えることができるのである。この表現で書き加えられた内容をポーランド語に翻訳すると次のような内容になる。

大地がまだ強固になつていなくて、浮遊する脂肪がくらげが揺れ動いているような状態の中で、「葦の若芽」のように刻み出された物から次々に始まった聖霊は「葦の伸びる勢いのあるすばらしい男性的な力」と名付けられた。

もちろん、もし人々が『古事記』の神話構成に全編を通じて支配的な堅固な一貫性があることを信じないなら、葦の芽のような物がそれに該当する神が出現する前に誕生する、という矛盾した順序のもつ意味を問う解釈はありえなくなるのだ。

ところが、大地はまだ固まっていないうし、宇宙生成の秩序にまだ反するような状態であることが述べられていて、男女の形態の区別も可能となっていないにもかかわらず、「男性（能力）」の性的役割が利用されていて、それと同時に一方で、限定された世界が興隆する前の普遍的世界の状態について語るために、植物学的かつ動物学的表現が利用されて語られているのである。

そんな表現の記述のままに解釈することは、上代の日本人の神話的説明の論理性に対して重要な疑問を抱く可能性を前もって放棄して、疑問の余地をなくすことになるだろう。だから、率直に言つて、それはテキストの研究において、あらゆる考察を可能にする道を閉ざすことになるのだ。

そこで、誤つてまとめられた可能性のあるすべての注釈や「葦の若芽」の内容に関係した考察を一旦放棄する必要がある、本書

ですでに考察した三番目の神の名前カミムスビに直接に関係づけながら、この神の名ウマシアシカビヒコヂの別の解釈を発見し直さなければならぬ、という結論になる。

すでにもう一九八三年のことになるが、筆者は、ウマシアシカビヒコヂの名前について、本稿と異なつた証明に基づいた翻訳を発表している。それは「統合と遂行の能力を導き出す聖霊」であつた。筆者は同時に、この聖霊は、「生命力を解き放つ聖霊」すなわち世界を秩序立てる分野で、確実な意味で、その神に先行する神々と共同作業をする神である、という補足的な仮説を構想していた。そのとき次のように述べている。

神話の構想者は、大地の泥膏を凝縮（統合）させて、まだ物資の不足状態が見えているその大地に、この神の役割を全うさせる可能性を確実にするために、物理的な要因となるものが必要だつた。というのは、その神が考え出された際の情況は、大地はまだ出来たばかりだつたし、油が浮遊しているにも似た状態で、クラゲが漂うような状態だつたのである。以上の記述には温度という要素が考慮に入れられていなかった。ただ、凝固する状態に見られる温度は予想されていたのだが、新しく出現した聖霊が注意を向けることによって、大地が固定するというその見込みを保証することが見落とされていた。そのときに、マグマの動きやその塊の移動や海洋の原質が深みに入つて冷やされることが重要視されていた。そうして、陥没や縮小化を取り繕つて、大地を円滑な原野にする天界の能力を保証させたのである。

一九八六年になつて、この名前に細心の注意が払われていなかった

た右記のような記述は、単なる修辭なのだと考え直して、こう述べた。

「集合と完全化の能力の萌芽を拡散させる神」。この神はこのように神々の神殿に位置づけられていたと確認できたと思っていた。

その後、さらに時を重ねるにつれ、筆者は、『日本書紀』Nihongi のテキストにある名称の漢字の図形が不用意にも重視されていない解釈に出会い、『古事記』の名称も、図形はただその形をしているに過ぎないので、意味を確定するものではないのだという確信を強めていった。『日本書紀』では、表記されたその神の本質を示す方法で確実に転写がなされているのだが、しかし、その意味論的に似た方法で適応された表記に隠された意味は、われわれが上代の声調を考慮することによって再現させる余地が残されていることに気付いたのである。『古事記』の場合の、そこに適用された音韻の見地からの表記は、その再構築を本当に困難にしていた。付言すると、異国の文字によってその表記が提示されていたので、研究の上で懐疑的になる人々は、おそらく、従来の解釈に解決の道を見ているわけではなく、その従来の再構成による原初の姿の再現は信用できなかったにちがいない。

ただ、解釈の拠り所となるよりよい史料が欠けていることを考慮しながらも、神名の声調の形態は *wu'ma si'a si'ka bi'ŋ'ko'di* だったとしていた。一九八六年の段階で把握したこの配列は今では *wu'ma si'a si'ka bi'ŋ'ko'di* だと確認している。

この名の後半部の総体は *kabliŋkodi* つまり「力をまき散らす任務を与えられた神」であることが確証され、それは以前の筆者の

解釈と変わりなく保持されたものだが、前半部分の解釈の確認が不足していた。なぜなら、その部分の納得できる声調の確定ができていないからであった。だから、どのようにこの神が能力を発揮できることになるのか、新たに考えなければならぬ。と言うのは、*si'a* という音節は古代の日本語の形態素が語を構成する原則からは並んで現われることはないのだから。ここにはつきりと語構成の問題が絡んでいる。そうして、*wumasi* が *wumu* という語から派生した動詞の形態をもっていることは極めてあり得ることなので、『日本書紀』から知り得る *wu* という声調の語は、次の意味があることになる。

- a) 疲れて、困憊して、嫌々ながら
- b) 化膿する、腐敗する、壊れる、崩壊する
- c) 成熟する、熟しすぎた状態になる
- d) 紡ぐ、糸をかける、巻く、編む。

以上の意味の初めの三つは互いに近似性があると思われ、それによって、すでに混沌の神の名に見えていた「崩壊」という意味との関連が想定される。考えられる四番目の意味は、前の三つの意味とは近似性が示されていないと同時に、前に検討した二柱のムスピの神の名とは関連がない。

以上から、検討しているこの新しい神ウマシアシカビヒコヂが、破壊の能力を呼び起こして、それ故に、混沌の何らかの継続者かあるいは支持者であるとした筆者の従来の解釈に疑念を抱くことが可能である。とりあえず、構成を次のように分析しておく。*a'se* + *yi'ka* は、それぞれの形態素としての意味を漢字に当てると、根と巖が相当するので、「消滅させる力」という意味になり、そ

れによって、この神は、*osika* と発音される常に汚されている存在であると考えられる。そこで、名称全体は、破壊を減退させる能力を拡散させる任務の神、と解釈することができる。それだから、実際には、その神は混沌の継続者であることはなく、却って、混沌を無にする者で、このような役割は、古代の「破壊と活気の欠落」が「活気が解放される」段階に至ったときには不可欠なのだと考えられる。

だが、ここで、さらにまた、この新たに出現した神ウマシアシカビヒコヂと統合と分散化というその前に出現しているムスピの二神とがどのような関係にあるのか、という問題が出てくる。例えば、実際に、物質の統合と分散化の過程は、万物を獲得した全体をなしている、つまり、すでに周知のように、現実世界の固成に貢献するという変化、それだから崩壊の無化という変化の他に、この過程の意味はないのである。

それならば、何のために混沌を無化する三番目のこの神がまだあるのだろうか。この疑問に対する解答は、この明確でない情況が存在する理由を示す堅固な証拠に欠けるので、決定することはできないように思われ、ある推定へと進むことだけができる。その推定の一つとして、双方の神話物語がそれぞれ別の地域で関係なく発生したのだらうという類の説として知られている。そこから、ここで考察しているウマシアシカビヒコヂの神は、混沌と対峙している変化のモデルとか、あるいはそうした者だという結論が出せるかもしれない。もちろん、今私は、「葦の芽の能力の男性」という誤った翻訳を選択することには注目はしていないが、それに近い筆者の最新の翻訳の内容を捨てたわけではない。

「種まく者として任命」する過程のモデルが統合と分散化というモデルと関係なく企画されたとは考えられないと思う。なぜなら、「崩壊を無化させる能力」の必要性は、生物学的に否定的な崩壊の観察の後に現れるからだ。しかも、すでに注意を喚起したように、生物学的に肯定的な局面を崇拜することがむしろ好ましく思われていたに相違ないのだから、否定的な現象は、しばしば暗闇の中に放置されて意識の周辺の圏外に保持されていたので、その真義が忘れ去られたのであろう。

このように考えてみると、「崩壊を無化する力の種蒔き役に任じられた聖霊」であるウマシアシカビヒコヂという統合と分散の役を担う聖霊とその行動は、混沌の状態を取り除くための神々の責務が何らかの程度十分に機能しないという時に関わって行動する、いわば予備役のような存在である、と認めることが道理になつていたのだらうと思うのだ。

どれほど多くの統合と分散の力をめぐる考え方にあって、宇宙規模で混沌と戦う明白に合理化されたモデルが思い起こされてきていることだらうか。また、存在する物の動きに関与することをおんで、崩壊（混沌）の掃滅を起こす有力な力に呪力をもたせることが適度に必要だと考えた人々がいて、誰もが理性的な体系を信じていた信者であつたわけではないことは、様々な競合する宇宙生成のモデルがあつたことからわかる。呪力を信じたのは、高度な教育を受けた階層の人々から生まれ出たのではなく、率直でやや幼稚で民衆的な考えの方から生まれたのだらう。そこで、間違いなく利益をもたらす祈願のための呪術的な基盤を人が素早く実行する支持者をもつことが、一見、大切に都合の良いのだと考え

られるのだが、率直に言って、呪術的な基盤も含めた神道的追求の揺るぎない堅固な数々の観念の多くが、さらに長く維持されていった機会がなくて、忘れられたに相違なく、だから、この神は、早すぎるほどに社会の記憶から忘れ去られてしまったのではあるまいか。だが、その名の音やかすかな内容は長く保存されてきて、人々が受け入れるには難解な方法であつたが、頻繁に様々に解釈されてきたのである。結局、その中で合理的なモデルが、全体の流れの中で生き残つてきたのである。

いずれにせよ「葦の若芽の力」について、分析の際に、これ以上には確証し直す根拠を見出せなかった。もちろん現在の結果が偏に誤りの無い説だと考えてよいと、筆者自身は現時点で思っているわけが、それは、以前の解釈が声調を考慮に入れていないという、言語学的に不十分な立証であつて、今はその声調を考慮するという一歩進んだ方法に拠っているからだ。一方で、いっそう厳密に考察するために、ウマシアシカビヒコヂという神名の表現を「破壊を無化する力」と翻訳することが、何よりも確証づけられる翻訳だと考えているのではあるけれども、それが百%確実な証明だと言いつけることは出来ないだろうとも思っている。

「破壊と消滅の力」という形式での表現のこの理解が正しくないとすると、今のこの解釈によって検討しているこの神が、混沌を再活性化させる目的を持つていることが想定されてくる。だがそれは、宇宙生成の過程の一貫しない歩みになってしまうと考えることができるだろう。というのは、混沌とは、避けられないことであり、世界の修理固成の結果として、混沌の再活性化が考慮に入れられることはなかったからである。